第二章　季節のリズム

第一節　春から夏へ

1　正月の準備

ススストリ　昔はヒジロ（イロリ）で火を燃したので、暮れの大掃除は文字どおりススストリ（ススハキ・ススハライ）であった。戦前ぐらいまでは師走八日が過ぎると心づもりをしたが、その後は学校の冬休みが始まる二五日ぐらいが中心となった。

まず今年の青竹でススストリボウキを作る。当日は朝早くから庭にムシロを敷き、神仏や家財道具を出して畳を上げる。戸をしめて手拭でホッカブリした男衆が、ススストリボウキで天井、梁などのススを払う。女衆はススをはき、雑巾がけをする。床が乾くと畳や家財道具などを入れ神仏も戻す。ススストリが終ると障子張りをして、正月を迎える準備ができる。

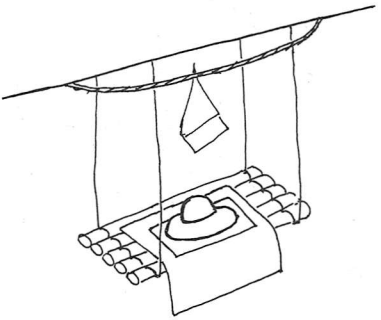
夕食は白い米の飯にケンチン汁か豆腐の味噌汁、魚の開きなどを添える。神棚に灯明をあげ、御神酒を供える。

餅つき　期日は二八日がもっとも多い。二九日はクンチモチ（苦に通じる）といわれ、三一日はイチヤモチ（一夜

餅）といって嫌われた。二八日につけないと三〇日になる。

田が少なく米が貴重なので、材料は餅米のほか、粟や黍、稗も使われた。多い家で一俵（四斗、六〇キログラム）、少ない家でも二斗ぐらいついた。餅つきは本分家が集まってつくことが多い。

前日に米をとぎ、杵や臼を洗ってデエドコ（台所）に据え箕をかぶせておく。朝早く起きてカマドに盛り塩をして清め、大釜に湯をわかし米など入ったセイロをかけて蒸す。材料がふけると男衆がつき、女衆が手返しをする。ふつう一斗を三臼ぐらいでつく。つき上ると女衆がのし餅をつくる。お供えは最後の臼でつき五、六スワリから多い家で二〇スワリにもなる。この臼で小豆あんの入ったジザイ餅を作る家が多い。餅切りは翌日、男衆が餅切り定規をあてて切る。



図Ⅳ-30　年神棚

餅つきの日の昼食は、つきたての餅を大根おろしで食べるカラミ餅、夕食は白米飯にトウフとネギの味噌汁である。

正月飾り　イチヤ飾りを嫌い、多くは三〇日までに、今年とれた新しい藁でシメ飾りをなう。作るのは家長か長男である。大神宮様は一番大きく、ほかは小さめである。

年神様を迎えるトシガミ棚を作る家もある。ふつう神棚の隣に祀る。コージン様は幣束を三本たてる。オカマ様は一本である。稲荷様などの屋敷神、便所の神様などのお飾りは右ナイの縄にシメ飾りを下げる。大神宮様のお札や幣束は、神明社や熊川神社からもらい、熊川ではこれを、「オカマジメをもらう」とい

う。

門松は福生、熊川とも立てない家が多い。

ミキノクチ　神様に供える御神酒を入れるオミキスズにさすもので、大小各種ある。加美のH家に技術が受け継がれて、暮れの市に売られている。各家では毎年新しいものを求めて、大神宮様やエビス様に供える。

暮れのつけとどけ　子供の初正月には、嫁の実家や親類から男の子にはハマヤ（破魔矢）、女の子には羽子板が贈られた。贈られた家では床の間やナゲシに飾った。御祝儀のおこなわれた初めての正月は、お世話人に荒巻鮭を届ける。

晦日（みそか）の市　暮れの二八日に駅前通りに市がたつた。正月用品を中心に呉服やオモチャなどの露店が出て、大変賑わった。戦中、物不足ですたれたが戦後復活し、昭和三〇年（一九五五）頃までつづいた。

オオミソカ　家の内外の掃除をし、正月の食物の準備など忙しい日である。主な行事をあげてみる。

ヤクハライ（厄払い）は福生市域ではアクマッパライともいい、その年の心身のけがれを払い、新しい年を迎えるためのものである。ヤクハライには神社からの幣束をつかう。家長は風呂に入って体を清め、家族の体を払う。終わった幣束は門口の土にさしたり戸袋にさす。

火難除け　夕方、白い米の飯が炊けると、親指の先ぐらいの小さいおにぎりを五個つくる。最初にヒジロの神コージン様にあげる。あとの四個はマッコの四隅の灰の中に埋める。火難除け、特に子供が火傷（やけど）しないように祈った。

この夜「借金ナスガラ」といいながら、ナスガラを全部ヒジロで燃す。大晦日の晩に早く寝ると白髪になるといわれ、子供も除夜の鐘を聞く頃まで起きていた。夕食は白い米の飯にヒバ（大根の葉の干したもの）と豆腐の汁が多い。

ミソカソバも食べたが、ウドンが多かった。スナハライのコンニャクも食べる。

2　大正月

トシオトコ　元日から三日までのサンガニチ（三箇日）は、年男が朝早く起きて若水（わかみず）を汲み、ヒジロの火を改め湯をわかす。朝風呂に入って体を清め、神仏へ供え物をし雑煮を作る。女衆は一年中でこの三日間だけはゆっくりできた。神様には御神酒と灯明をあげるが仏様にはお茶と灯明である。お供えは元日にあげる家と三〇日のお飾りをする日に供える家とがある。

雑煮の餅は焼いて入れる。中身は大根と芋はかならず入れ、家によって人参、ゴボウ、小松菜かホウレン草を加える。醤油味のすまし汁である。数は少ないが雑煮は食べないで餅だけ食べる家もある。仏様に供える。

年始まわり　神主宅とお寺へ、元日か三箇日の中に年始に行く。半紙と手拭にお札料（ふだ）（お金）を添える。四日に両者から返礼のお札が届く。シンヤ（分家）はオオヤ（本家）に半紙と手拭を持っていく。お世話人宅へも挨拶する。婿は嫁の実家に行く。三年ぐらいはかならず暮についた餅（半紙大）五枚に水引をかけ、手拭をそえるのが普通であった。

ウタイゾメ　熊川では一月七日に家長が年番の家に集まり、今年の年番とニワバの行事の大すじをきめる。ウタイゾメという。内出ではデゾメといった。南、内出では長男が一五歳になると（鍋ケ谷戸では一七歳か一八歳）この席に酒一升持って挨拶し、以後一人前として扱ってもらった。昭和三〇年代（一九五〜六四）までおこなわれ、現在は集落の新年会となっている。

七草　七草粥を朝食に食べる。七草は大根、人参、ゴボウ、ホウレン草、ネギ、セリ、ナズナで油揚を加える家が多い。醤油味のオジヤにする。神仏に供える。

七草はまた爪を切る日にもなっていた。七草の一つナズナで爪をこすってから切ると、指の病にかからないといわれた。この日お供えやお飾りを片付ける家が多い。

クワイレ　一一日におこなわれ、畑作の仕事始めの儀式である。ノイレ（野入れ）、ウナイゾメなどともいう。この日朝早く起きてお供えをのせた半紙をつかい、真竹につけて幣束をつくる。これを近くの畑にさして、お供えのくだいたものとオサンゴ（お洗米）を撒く。東か南、または恵方を向いて鍬で一さくりして、今年の豊作を祈る。

クラビラキ　一一日、蔵の入口の扉を朝から開けておく。朝食は七草におろしたお供えをくだいて作る雑煮である。夜はウドンかソバを作って供え、家族も食べる。蔵のない家でもお供えを雑煮や汁粉にして食べる。

3　小正月

小正月は大正月と違い、その年の農作物の豊作を祈る行事が中心となっている。小正月のモノツクリは、一月一一日から始まる。

アワボ・ヒエボ　アボヘボともいう。ニワトコ（接骨木）、ヌルデ、ミズキ、ネブタ（ネムの木）など、皮のよくむける木をつかい、一五センチメートル前後に一〇本切る。その半分は皮をむく。真竹の先を割って一〇本ぐらいのササラにし、切った先をさし込む。堆肥の上にこの竹を立てる。豊年を願う行事といわれ、魔除けにもなるという。

ワカモチつき　寒につくのでカンモチともいう。小正月のオシラ様（蚕神）にあげるお供え、小正月に里帰りする

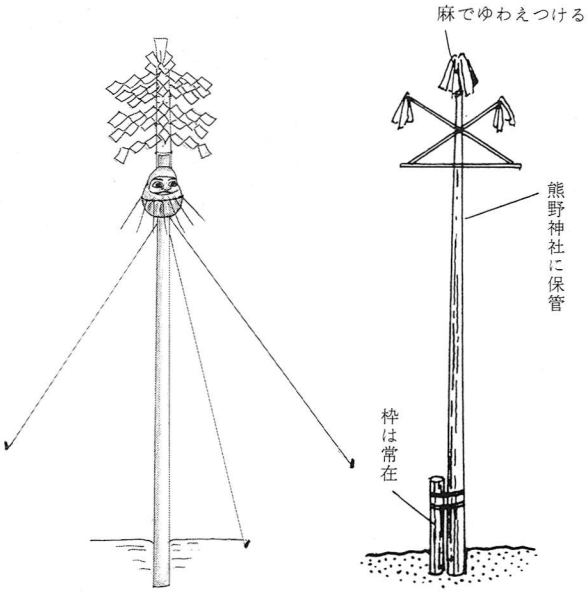
図Ⅳ-31　アボヘボ（S家　牛浜）

嫁に持たせる大判（半紙大）の餅などに必要であった。

メエダマ　一二日にウルチ米を石臼でひき、小豆を煮る。メエダマは一三日の午前中に作り、午後飾る。「十六メエダマ」といって、大きいのを一六と小形のものは繭の形をしたものを含めて六〇個ぐらい作る。メエダマをさす木は、ツゲ（ダンゴの木）、梅、カシ、柳が多い。長さ一・五～二メートルぐらいに切り、石臼の穴にさして固定する。十六メエダマを枝にさし、間に小型のものを形よくさす。麻糸のほぐしたのを蚕のアジ（蚕が口から出す糸のこと）に見たてて枝にかける。座敷に飾り、蚕影山の掛軸をかけ、オシラ様の像に御神酒と灯明をあげる。小豆あんのダンゴも作るが、家族用は小麦粉が使われた。メエダマは一六日にもぐ。メエカキ、マユモギなどという。このダンゴは、ゆで直したり焼いて食べる。シミマユになるといけないといって、醤油をつけず砂糖で食べた。

成り木責め　一三日は庭の成り樹木である梅、柿、

図Ⅳ-32　メエダマ飾り（M家　中福生）



図Ⅳ-33　セエノカミ（左は南・男神，右は内出・女神）

栗などの木の幹をナタで子供に軽く叩かせる。叩きながら唱え言をいうので賑やかであった。

「ナルカ　ナラネエカ　ナラネエト　ブッキルゾ」

「ナルトユウカラ　ヨーセヨ」

戦前頃までよくおこなわれていた。

セエノカミ　熊川地区の南と内出で戦前までよくおこなわれていた。南では七日に年番がでて、セエノカミを祀る五間（九メートル）ほどの柱を立てた。場所はセエノカミドと呼ばれた家の前の辻であった。各家から集めた、お供えの下に敷いた半紙五、六〇枚で幣束をつくり、セエノカミの依り代として柱の上に立てた。この日子供たちは朝早くから年番が太鼓を叩き「セエノカミダセーナ、ダサネエト　ヨメノケツタタクー」といいながらスストリボウキ、ダルマ、正月のお飾りを集めた。ドウドウ近くの広場に四本柱を立てて小屋を造り、集めたお飾りなどをくくりつけた。小学校高等科の者が大将になってとり仕切った。昔はセエノカミの依り代近くに作ったが、ソソウ火があって移したという。セエノカミは一三日に倒す。子供たちは上に祀った幣束を家々にくばって、おひねりを貰った。

セエノカミは南は男、内出は女と昔からいわれている。

ダンゴ焼き　一四日の早朝、年番が「ダンゴ焼きコーエー」と呼んで歩き人を集める。子供たちの造った小屋に火をつけて燃す。各家ではメエダマダンゴを持っていき、この火で焼いて食べた。風邪をひかないといわれた。現在はセエノカミもダンゴ焼きもおこなわれていないが、熊川神社の境内で正月飾りなどのオタキアゲがされる。

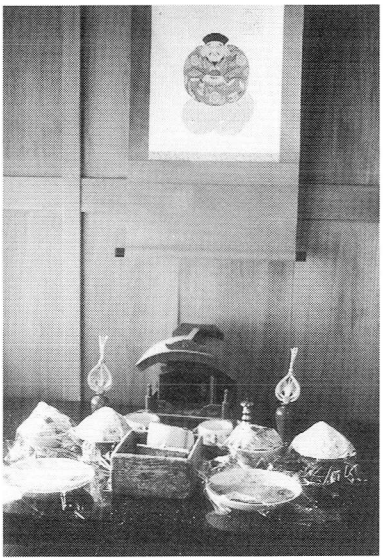
福生地区では、明治初年（一八六八）までおこなわれたというが火事になってやめたという。大正の頃、子供たちがお飾りを集め燃したり、幣束を切って売ったりしたが、つづかなかったという。

小豆粥　十五日粥ともいって、一五日の朝は小豆粥を食べる。繭玉作りに煮た小豆を汁と一緒に入れて作る。塩で味付け、餅も入れる。神仏に供えた。

エンマのアカメシ　一六日は地獄の釜の蓋のあく日でエンマの休日といわれる。仕事を休み、朝食に小豆飯を炊く。各家では墓まいりをする。

ヤブイリと嫁の里帰り　小正月の休日は福生では一五、一六、一七日の三日間で、一五日が嫁の里帰り、一六日がヤブイリである。小正月の里帰りが初めての嫁には、メエダマダンゴを重箱いっぱいと、サンマの開きを五枚ぐらい持たせる。ワカモチをついたときは大判三枚組をつけた。古い嫁はヤブイリの日に日帰りで帰ることが多かった。この日作代や使用人は実家に帰して休ませる。大正月は女は里へ帰れなかったので、小正月を「女の正月」といった。

山の神　一七日を山の神の日とし、熊川ではこの日は山に行ってはいけないといわれた。しかし八日を山の神の日とする地域が熊牛や加美にある。



図Ⅳ-34　エビス講

エビス講　一月二〇日と一〇月二〇日の年二回おこなわれる。エビス講の掛軸をかけ、その前にチャブ台をおく。上にエビス、大黒像をかざってお膳を左膳に整える。ご馳走は小豆飯のお高盛りに、煮物は大根、里芋、チクワなどでかならず尾頭付きのサバ、アジなどを生で供える。御神酒、灯明をあげる。一升枡に家中の財布を入れて供える。

エビス講には正月の風をあてないといって、子供の書初めなどもすべて片付けた。次の季節を迎える心構えとしたのであった。

4　立春をすぎて

節分　立春の前日で新暦では二月三日か四日頃になる。市域ではこの日をトシトリ（年取り）という。トシトリの行事は、ヤッカガシと豆マキである。

メザシ（イワシ）の頭を豆ガラにさしてヒジロで焼く。このときメザシの頭にツバキをかけて「米ノ虫　粟ノ虫　エンドウ虫、ヨロズノ虫ノ口焼キ」「カンノ虫ヲ　オッツブセ　貧乏神ヲ追イハラエ」などと唱える。このヤッカガシをヒイラギの枝とともに、家の四隅とトンボグチにさす。

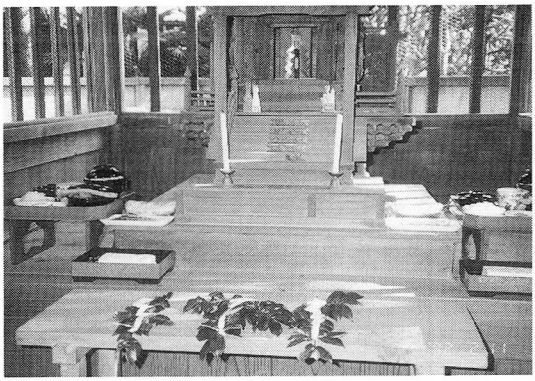
豆マキは夕方、大豆をホーロクでいって、一升枡に入れて大神宮様に供える。豆を撒く人は家長でトンボグチは開

けておく。豆マキの掛け声は「福ハ内　福ハ内　鬼ハ外　鬼ハ外」「鬼ノ目玉ヲ　ブッツブセー」で、大きな声で唱える。最初に撒くのは大神宮様で、仏様、オカマ様、コージン様などにも三回ずつ唱えながら撒く。家の中を撒き終ると、戸をしめて福を逃がさないようにする。外へ出て蔵、外便所、井戸、屋敷神などに撒く。終ると家族は年の数だけ豆を食べる。マメに暮らせるという。残った豆は、はじめて雷が鳴ったとき、食べると魔除けになるといった。

コトヨウカ　二月八日と一二月八日は、コトヨウカまたはヨウカゼック（八日節供）といわれる。二月八日をコトハジメ、一二月八日をコトジマイまたはコトオサメというが、逆のいい方も聞かれる。多くのモノビの中でも、大切なけじめの日であったようである。

この日はまた鬼がくる日だといわれ、履物（下駄）を外に出しておくと、鬼がきて判を押していくので、夕方には下駄などは全部デエドコ（台所）に入れた。判を押されると病気になるという。魔除けとしてメケエ（目籠）をトンボグチの軒につるした。一つ目の鬼に目のたくさんある目籠を見せて驚かせ、退散させるためである。またヒジロや風呂で、生のグミの木やネギ、唐辛子など燃して臭い煙を出したり、肥溜をかきまわして臭いにおいを出して、鬼がこないようにしたともいう。

初午と稲荷講　初午は稲荷様の所有の形から各戸でおこなわれる場合と、本家を中心としたイッケ（一家）の行事として、またクミアイ、近所など十数軒集まる稲荷講もある。さらに大きく長沢稲荷や牛浜稲荷のように、集落全体参加の盛大な稲荷講となっている場合がある。どれも子供の大変楽しい行事であったのが特色である。一般的なお祭りの内容は各戸では赤飯や小豆飯を炊き、稲荷様に集まってお宮の掃除をする。正月のシメ飾りなど持ち寄ってオタキアゲをする。その火でメザシを焼いて食べる。稲荷様には五色の旗をあげる。旗は天から地へ青、白（黄）、赤、緑、



図Ⅳ-35　初　　午

黒の順に紙を貼り、子供に「奉納正一位稲荷大明神」と書かせた。「子供の旗」ともいう。稲荷様には赤飯、油揚げなどを供え、御神酒、灯明をあげ、子供たちに菓子をくばる。集団の場合は、このあとオヒマチをした。

初午は現在もおこなわれているが、子供たちはほとんど集まらない。

集落行事としての初午を、一五〇年の歴史をもつ熊川の南地区を例に、特色ある内容を記してみたい。

・初午の朝早く、女衆たちは小豆飯を炊いて一合ムスビを作る。できると年番が「ムスビモライニコー」と太鼓を叩いて知らせると、七歳までの子供が貰いにくる。

・稲荷様の前でオタキアゲの火を一日中燃す。メザシを焼いて供え食べる。メザシ二匹は藁で結び、社に吊した。

・供物は御神酒のほか、オシトネ（米の粉で作り小判型）二つを、ユズリ葉にのせてあげる。豆腐二丁もあげる。

・子供たちは太鼓を叩き「お稲荷さんのご用心、おあげこかげの段から落っこって、大事なところをすりむいた。コウヤク代おくれ」といって、賽銭を貰いに各家を回った。

・「稲荷免」といわれた田があり運用した。

現在この講は行事を簡単にして、会館でオヒマチを会費制でやっている。

三月の節供　ヒナマツリとは新しいいい方で、昔は単に節供、または三月の節供といった。嫁の節供ともいう。お雛様を飾り、節供の餅をつく。二月の末か三月一日につくことが多い。餅は菱餅にしてお雛様に供える。三枚、五枚、七枚重ねとあり、色は紅白、または黄（粟）、白、青の三色にする。ハマグリもかならずお雛様にあげる。

二月二八日に福生駅前通りにヒナ市がたった。雛はこの市で求めたり所沢などから買った。お雛様は餅つきの頃飾り、一二日間は飾っておくのがよいという。節供がすんでから、いつまでも飾っておくと、娘が縁遠くなるともいわれる。

嫁入り後の初の節供には、嫁の里からオクリビナ（贈り雛）をする。高砂の翁と媼の人形が多い。初めての女の子の初節供にも嫁の里からお雛様が贈られる。多くは内裏様である。オクリビナのお返しは、菱餅と尾頭付（サンマの開き）にハマグリをつける。嫁の里帰りの三日に持たせた。

彼岸　春分の日を中心とした七日間を彼岸という。最初の日を彼岸の入り、最後の日を明けと呼ぶ。彼岸が近づくと墓掃除をする。お中日は仕事を休むので墓参りに行くが、最近は日曜など都合のよい日が多い。家ではボタ餅を作るが、仏様に供え重箱に入れてお寺に届ける。新仏があると親類などにもくばる。嫁は日帰りで里帰りし、先祖の墓まいりをする。

神明社の春祭り　四月三日で福生地区のウブスナ様のお祭りである。各集落から四人の年番が出て祭りを総括する。神明社のノボリを立て、お神楽がありお囃子も賑やかであった。この日は皆仕事を休み赤飯を食べ酒も出て楽しむ。

カイコヒマチ　女のオヒマチでダンゴヒマチともいう。春蚕のはきたて前の四月の初め頃にやり、ダンゴを作りオシラ様の掛軸をかけて一六個供え豊作を祈る。

花祭り　四月八日のおしゃか様の誕生を祝う日で、お寺では花祭りがおこなわれる。「オシャカ様の日」ともいう。天上天下を「指さした」お釈迦様の像を安置した花御堂にお参りし、甘茶を像にかける。子供たちは甘茶をもらいにくる。各家では、出はじめたクサノハナ（ヨモギ）をつんで草餅を作って仏様に供える。

熊川神社の春祭り　四月一〇日で、熊川地区のウブスナ様のお祭りである。年番、氏子総代、神主が中心になって、境内にある琴平神社のお祭りも合せておこなわれる。年番は前日にノボリを二本たて、余興舞台を造りお神楽が奉納された。各家では赤飯を炊き、クサノハナ餅をつくる。

春のスストリ　春蚕の準備のため四月の末頃には、スストリがおこなわれた。蚕室となる部屋の畳をあげ、ウスベリを敷いた。終わるとスストリマイダマを作った。

五月の節供　五月五日は男の子の節供である。四月二八日に福生駅前通りに五月人形や鯉ノボリを売る市がたった。長男の初節供には嫁の里や親類から、鯉ノボリや鍾馗（しょうき）様などの武者人形が贈られる。鍾馗様などの絵をかいた家紋入りの絵ノボリを外に立てる家もあった。鯉ノボリも人形も四月一〇日から中旬にかけて飾る。

五月四日は宵節供でショウブ湯に入る家もある。五日はどこの家でも柏餅をつくり、赤飯を炊く。贈り物の返礼はカサゴ（鰹）の干物に柏餅を添えた。柏餅のことは、オカシワといった。

夏上がり　春蚕のあがる六月の中旬から下旬に、嫁にシキセとして浴衣（ゆかた）などを新調してやり、子供を連れて里へ泊りにやる。夏上がりという。この日はフカシマンジュウを作って持たせる。蚕の世話や麦刈り、家事と休む暇なく働いた嫁を休ませる日であった。なお嫁にきた最初の年だけ秋上りといって晩秋蚕の終ったあと一泊の里帰りをさせたところもある。

5　盆の行事

盆は一年に一度、先祖の霊が家に帰ってくる日である。「盆　暮れ」という言葉があるように盆は正月とともに一年の大きな区切りとなるときであった。福生市域では大正後期までは八月二、三、四日であったが、一日は八雲神社の祭礼があり、初秋蚕の忙しい時期と重なるので、現在の七月一三日から一六日の四日間としたという。

ボンコとツクリバツ　仏様に供える初物をツクリバツといって、市域では麦バツが多かった。収穫したばかりの小麦を粉にして六月下旬から寺に届ける。ボンコ（盆粉）といった。盆の供物の盆供（ぼんこう）であった。

盆棚　盆様迎えをする一三日の午前中から作る。盆棚はザシキ、またはデイの間に東か南に向ける。給桑台や机などを使った台の上にボンゴザを敷く。台の四隅にニイコ（今年の新しい竹）を立てる。チガヤを左ナイになって周囲にめぐらす。竹が左右の場合は三方を障子で囲む。

図Ⅳ-36　盆　棚

ボンダナの内側には仏画をかけ、先祖の位牌を奥におく。仏様の乗り物のナスの馬、金銀の紙で作られたハスの花のボンバナも飾る。供物は初物の小麦で作ったソウメンとフカシマンジュウ、初物の野菜と水である。ミソハギは丼に入れた水を供物にふりかけるため

である。

チガヤの縄には、ミタビ（いんげん）やゆでたソウメンをつるしたりした。提灯の代りといってホウズキも下げた。

盆様迎え　一三日の夕方、家のカドグチでムギカラ（麦藁）に火をつけて「ボンサマ　ボンサマ　オムカエモウス」と子供たちも一緒に唱えて先祖を迎える。この火を線香に移して仏壇にあげる。墓が近くにある家では、夕方お墓で線香をつけ、家まで先祖を案内してくる。近頃は麦も作らなくなって、オガラを買って形だけ迎え火をたくか、やらない家も多くなった。

施餓鬼　一五日または一六日に寺で精霊の供養のために、施餓鬼の法要がおこなわれるので寺に行く。先祖供養の塔婆とセガキバタをもらい、家のボンダナにおく。これは送り火が終ると墓に立てる。供養料は戦後まもなくまで、米や小麦粉の盆供であった。

墓参り　一六日は地獄の釜の蓋のあく日で、エンマノサイジツともいい、一月一六日と同様、皆仕事を休んだ。嫁も里帰りし、奉公にいっている者も帰ってきて、家族そろってお参りした。寺にはフカシマンジュウを届ける。

盆様送り　一六日の夕方、送り火をたいて盆様送りをする。盆棚に線香をあげ、この火でカドグチまで案内し送り火で送る。このとき「ボンサマ　ボンサマ　オオクリモウス」と唱える。

新盆　新盆の家では盆提灯を縁側の軒につるす。夕方には灯を入れて、新仏が迷わず帰れるように願ったのである。またマイツメブクロといって、晒（さらし）で三角に縫った袋に米を一升入れて寺に届ける。ツクリバツもいつもの倍ぐらい届ける。親類は新盆の家に集まり墓参りする。

盆礼　盆の期間中に嫁（婿）の親元、お世話人、オオヤ（本家）など日頃世話になっている人に贈答がおこなわれ

る。先方の仏様への供え物で、今年の小麦粉で作ったソウメンやフカシマンジュウがつかわれた。戦後おこなわれている中元は、仏様に関係なくお世話になっている方への贈答である。

6　夏祭り

天王様のお祭り　宵宮が七月三一日、本祭りが八月一日である。八雲神社のお祭りで、福生では神明社に、熊川では熊川神社と真福寺の境内に祀られている。明治になって、牛頭天王社が八雲神社（祭神素戔嗚命）に変ったが、言葉だけは天王様のお祭りとして人々に伝えられている。明治二七年（一八九四）頃一度中断するが、大正の中頃には子供中心のお祭りとして復活する。大正末から昭和にかけて、青年も神輿をかつぐようになる。花万灯なども作られ、子供たちは先輩からお囃子を習って現在も引継がれている。二日には八雲ヒマチがおこなわれた。現在は七月末の日曜日になっている。

第二節　秋から冬へ

1　秋は来ぬ

八朔祭り（熊川神社の秋祭り）　九月一日で立春から二百十日に当るこの日、嵐がこないように願っての秋の例祭であった。旧暦では八月一日に当り、八朔祭り、または風祭りともいわれた。春の例祭と同様におこなわれたが、秋

は地芝居がよくかかった。

福生地区では、九月一日をやはり八朔といって、作物を荒らす嵐がこないように祈ってオヒマチをしたという。

十五夜　月見という。新暦の九月一五日にやるところが多くなったが、もとは旧暦の八月一五日の満月の日におこなわれた。ススキを一升徳利などにさし、月見ダンゴを一五個作って供える。初物のサツマイモ、里芋、柿や栗などと一緒に箕に入れて、お月様の見える縁側などに飾った。

この夜、子供たちは近所の家をまわり、供え物をとりにいった。「カキクンナ、マンジュウ　クンナ」などといって歩き、各家ではとられるのを歓迎した。十五夜の晩は里芋を煮て食べることが多かったという。

十三夜　旧暦の九月一三日におこなうことが多い。片見月はよくないといって、十五夜をやったら十三夜をやるようにした。供え物はダンゴの数が一三になるだけで、同じである。

エビス講　一〇月二〇日で、農家では収穫後であるので、正月のエビス講より盛んであるという。一〇月は神無月で神様は出雲へ出かけて留守だが、エビス様は残っていると信じられている。

オカマノダンゴ　出雲に集まった神様が三一日には帰るので、そのみやげのダンゴを作る。オカマ様に供えるのでオカマノダンゴという。三六個作るので三十六ダンゴともいう。娘のいる家では良縁が得られると床の間に供え、灯明をあげる家もある。

彼岸　秋分の日を中心とした七日間をいう。行事の内容は春の彼岸と同じである。

ミクンチ　九月の三回の九のつく日をミクンチといっている。初クンチの九日は「重陽の節供」であるが、二宮神社（秋川市）のショウガマチの日で、福生市域からもショウガを買いに出かける人も多く、楽しみだった。一九日の

ナカノクンチは福生の神明社の秋祭り、シメエクンチの二九日も隣村（秋川市・日の出町）などに秋祭りが多くおこなわれている。

ミクンチにはミクンチナスといって、ナスを食べた。

2　稔りの秋

イノコノボタモチ　一〇月九日に作る家が多いが、一一月九日または麦まきが終った頃、麦まき祝いとして作る家もある。イノコ（亥の子）というが亥の日にはあまりこだわらない。「イノコノボタモチ三日喰い」といって、たくさん作って食べたという。大神宮様、エビス様に供える。

ドジョウ粥　一一月上旬から中旬にかけて、麦まきが終った後に食べる。ムギマキバライ、ムギマキガユなどともいう。粥か小豆粥の中にウドンやソバをドジョウに見立てて太く短くして炊きこんで夕飯にする。明治の頃は本物のドジョウを入れた話もあるが、麦が土にもぐってよい芽が出るようにという意味だともいう。割合早くすたれた。

オビトキの祝い　一一月一五日であったが、この日を中心に大安の日が多い。戦後は日曜日などにおこなわれる。幼児から子供に成長したことを祝う行事で、男女とも、数え年七歳である。最近では七五三の祝いといわれることが多い。一つ身や三つ身の付け紐を解き、子供用の四つ身を着て初めて帯をしめる。嫁の里から贈られた着物を着てウブスナ様にお参りするのが帯解きの祝いである。

3　冬も近づく

カワビタリツイタチ　一二月一日、馬の正月ともいう。馬を飼っている家では、この日馬を休ませ、ジゼー餅（大福）やボタ餅を作った。馬にも食べさせ家の者も食べる。馬を川で洗って赤い布を下げたりしたので、川ビタリともいう。馬がいなくても仕事を休んだ農家も多い。

コトヨウカ　一二月八日はシワスヨウカ（師走八日）といって、行事は二月八日と同じである。鬼のくる日でもある。ヨウカゼックといって今年最後のモノビであった。師走八日がすぎると山のクズハキができた。

アナップサギのカブダンゴ　師走八日は、アナップサギのカブダンゴを食べる日である。大根の収穫じまいのお祝いである。ダンゴとカブを小豆あんでまぜたもので、神棚に供え朝食とした。ブックルミダンゴともいう。

フイゴマツリ　一二月八日、鍛冶屋（かじや）では金山様を祀ってフイゴマツリがおこなわれる。仕事場の四方に竹を立て、中でフイゴを使って火をおこすまでの行事をする。親方は、小僧にクワやカマなどの小型の物を前日に作らせ、腕があがるように供える。お得意を呼んで酒、赤飯をふるまう。子供たちにミカンをくばる。

冬至　どこの家でもユズ湯に入る。風邪をひかないといわれた。この日はまた冬至トーナスといって、今年最後の南瓜（かぼちゃ）を煮て食べた。「冬至コンニャク　砂ハライ」ともいわれ、コンニャクを食べる家も多い。

第三節　暮らしと年中行事（その変容と消滅）

年中行事は一年を単位として、地域社会で毎年繰り返される行事をいう。それぞれの家で、個々に自由におこなわれる行事ではない。家が行事の主体であっても、それは村の中の家であって、常に村落社会とのかかわりの中でおこなわれるものをいうのである。

福生市域に暮らした人々は近年まで、主に畑作と養蚕に明けくれた、忙しい毎日を過していた。その中で年中行事は、季節の移り変わりにリズムをつけながら、生活に潤(うるお)いをもたせてきた。その根底には作物の豊かな実りと、災(わざわ)いのない平和な暮らしを祈る素朴な信仰が生きていた。これらは親から子へそして孫へと伝えられ、日本人の古い姿や意識を今日に伝えている。しかし戦後、私たちの暮らしは大きく変って、これら年中行事も失われてゆくものが非常に多い。そこで福生市域でも昔からのしきたりを、今日まで非常によく伝えられてきているI家（加美・農業）の、年中行事の移り変わりを調査してみることにした。

1　消滅とその原因（I家の場合）

I家の当主K氏（大正五年生）は、父母を昭和四〇年代に、妻を平成二年に亡くし、現在は実質的には息子夫婦に代替りしている。（年中行事の変化の表参照）

戦後四五年たった今、何が残り、何がどう変化して受け継がれているのか、消滅したものは何かを考えてみたい。調査の表には、昔の暮らしが色濃く残っている戦前と、経済の高度成長が始まる以前の昭和三〇年代と、現在（平成三年）の行事の変化をあらわしてみた。

○残されているものは何か。

Ｉ家は本家であって、先祖からの神棚や仏壇を引き継いでいる。そのため神仏に関係のある行事は、現在も形は多少簡略化されているが残されている。正月の大神宮様（神棚）のシメ飾りは、未だに自家で作って飾られる。稲作をやめた現在は、親類の高月（八王子市）から新藁をゆずり受けて使っている。エビス棚のシメ飾りも同様に作る。神仏に関連する正月の年男も引き継がれている。お供えは神仏に供えるので、現在も家で餅つきをしている。節分には豆撒きをおこなう。先祖の霊を祀る行事である春秋の彼岸、盆行事もおこなわれている。エビス講は春秋二回、大体昔のままの形で実施されている。今回の調査項目でみると、五〇パーセントがおこなわれていた。残りは、なぜおこなわれなくなったのか原因を考えてみる。

生活様式の変化　まず家の建て替え（昭和四七年〈一九七二〉）があげられる。ヒジロ、土間がなくなって、勝手はダイニングキッチンになり、玄関ができる。燃料の変化はスストリ、火難除けが消滅する。玄関ができて、事八日にメケエを吊したり下駄をしまうことがなくなった。電化製品の導入は洗濯機が一番早く、建て替え後、薪を燃さなくなって電気炊飯器になったという。

生業が変わる　養蚕は昭和三五年（一九六〇）で打切り、農業は次第に縮小された。小正月のアボヘボ、メエダマ（繭玉）を作らなくなり、春のスストリも必要なくなる。ハッサク（八朔）のまんじゅう作りをやめ、初物を供える十五夜、十三夜もおこなわれなくなった。

都市化と開発　昭和四〇年頃から山（林）が開発され住宅地となった。都市化への区画整理もおこなわれ、年神棚やアボヘボの材料の木が失われた。クズハキ（落葉掃き）もしなくなった。農業は縮小し麦も作らなくなって、盆様迎えの麦カラ（麦藁）は以前から貯えてあるものを使っている。チガヤも手近になくなり、盆棚は仏壇に簡単に作る

ようになる。昭和三〇年に上水道が敷設され、若水汲みは意味をなさなくなった。

意識の変化　代替りもあって、年始まわりなどもしなくなった。七草に爪を切ることも迷信だとしなくなる。物が豊かになって、モノビにはつきものの、赤飯、まんじゅう、草餅などもあまり喜ばれないので、必要に応じて買ってすますことが多くなった。

以前より盛んになったもの　一つだけでオビトキである。昔は長男、長女だけであったが、現在はすべての子供に華やかに祝われる。祖父母がこの地域の育ちであるので男女とも七歳でおこなわれた。

2　戦後家庭の年中行事（Y家の場合）

Y家（原ケ谷戸・サラリーマン）は、昭和三九年（一九六四）結婚で当主は福生生まれで妻もこの地方の出身である。分家で子供二人の核家族である。

神棚はないが、正月にはお供えを買って、勝手と居間に飾る。玄関や車にはお飾りを下げる。初詣でには行く。本家と実家の年始まわり、春秋の彼岸、盆の墓まいりなどはかたくやっている。オビトキは、二人の子供に七歳で神明社に参って祝った。そのほかでは食に関するものが比較的よく伝承されている。冬至と大晦日のコンニャク、年越そば、雑煮、七草粥、小豆粥など。冬至のユズ湯は若い世代にも好まれるようで、Y家はもちろん、比較的よく残されている。

三月と五月の節供の人形などは、子供が中学生くらいになると飾らなくなっている。以上が残されているものである。代って個人的ではあるが、新しい行事としてY家でも子供の誕生日が入ってくる。さらに母の日、父の日のプ

表Ⅳ-3　年中行事の変化（I家の場合　加美）（平成3年6月調査）

月	日	行事	内容	昭和20年まで	昭和30年まで	平成3年	メモ
12月	1	川ビタリ（馬の正月）	・大福をつくる ・馬に食べさせる	—	—	—	やらない
	8	師走八日	・カブダンゴを作る ・鬼が下駄にはんをおす	○	○	×	昭和44年までやった
	22〜25	冬至	・ユズ湯に入る ・砂はらいコンニャク，南瓜をたべる	○	○	○	
		ススト リ		○	○	×	家の建て替え後，大掃除程度になる
	28	餅つき		○	○	○	
	30	正月の準備	・年神棚をつくる ・オカマジメ（〆飾り）する ・オソナエを上げる	○ ○ ○	○ ○ ○	× ○ ○	昭和38年まで
	31	大晦日	・ヤクハライをする ・ナスガラを燃す ・年越そばを食べる ・火難よけ（ヒジロの角にオニギリ） ・コンニャク食べる ・除夜の鐘まで起きている	○ ○ × ○ ○ ○	○ ○ × ○ ○ ○	○ × × × ○ ○	昭和47年まで 白い御飯を食べる． 昭和47年ヒジロがなくなった
1月	1〜3	年男	・戸主が年男になる ・若水汲み ・朝食準備，1日〜3日 ・神仏へ供え物	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	水道の水を汲む
		初詣で		○	○	○	神明様　コンピラ様
		年始まわり		○	○	×	
		神主・お寺年始		○	○	○	
	7	七草	・七草がゆをつくる ・爪を切る日	— ○	— ○	— ×	やらない
	11	蔵開き	・蔵をあけてお供えをあげる	○	○	×	昭和40年まで
		クワ入れ	・ヘイソクを畑にたてる ・二鍬，三鍬さくる	○ —	○ —	○ —	
		アボヘボ	・アワボ，ヒエボをたてる	○	○	×	昭和40年まで．開発で木がなくなった
	12	若餅つき		○	○	×	
	13	小正月	・メエダマ作り ・ナリ木責め	○ —	○ —	× —	昭和40年まで
	14		・セエの神	○	×	×	
	15		・小豆粥を食べる ・嫁の里帰り，ヤブ入り	— ○	— ○	— ○	作らない
	16		・エンマの赤飯，墓まいり	—	—	—	やらない
	17	山の神	・山に行かない ・山に供え物をする	○ —	○ —	× —	昭和40年まで．開発で山がなくなる
	20	恵比須講（二十日正月）	・赤飯お頭付膳を供える ・サイフを枡に入れ供える ・羽子板をしまう	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	
2月	3	節分	・豆まき	○	○	○	
	(4)		・ヤキカガシ（ヒイラギにさす）	○	○	○	
	8	コト八日	・メケエを戸口へ出す ・下駄をしまう（鬼がはんを押す）	○ ○	○ ○	× ×	昭和40年まで
	11	初午（稲荷講）	・五色の旗をあげる ・メザシをやいて食べる ・赤飯を炊き飲食する	○ ○ ○	○ ○ ○	× × ×	稲荷様が移転し，やらなくなった

第3節　暮らしと年中行事（その変容と消滅）

月	日	行事	内容	昭和20年まで	昭和30年まで	平成3年	メモ
3月	3	三月の節供（ヒナマツリ）	・ヒナ人形をかざる	○	○	○	
			・餅をついて菱餅をつくる	○	○	○	
			・嫁が里帰りする	○	○	○	
	20	彼岸	・墓まいり（墓そうじする）	○	○	○	
			・お寺へあいさつ（ぼたもち持参）	—	—	—	
4	8	花まつり（オシャカ様）	・甘茶をもらいにお寺へゆく	—	—	—	
			・草餅をつくる	○	○	×	
	3 10	神明社春祭り（熊川神社 〃 ）	・赤飯，草餅をつくる ・煮〆，酒	○	○	×	
		蚕日待	・ダンゴとケンチン汁をつくる	—	—	—	
			・おしら様の軸をかざる	—	—	—	
	下旬	スストリ	・蚕室のたたみを上げる	○	○	×	養蚕は昭和35年まで
5	5	端午の節供	・五月人形，鯉のぼり	○	○	×	五月人形を飾る昭和35年まで
			・ショウブ湯	○	○	×	
			・ショウブを屋根にさす	○	×	×	
			・赤飯，柏餅	○	×	×	
6	中下旬	夏上がり	・嫁の里帰り，まんじゅうふかすシキセする	—	—	—	
	30	水無月祓い	・お祓いをする	—	—	—	
			・神社からカタシロをもらい納める	—	—	—	
7		盆礼	・ソーメンのやりとり	○	○	×	現在は中元となる
	13〜16	盆	・盆棚	○	○	○	仏壇を利用してつくるようになる
			・迎え火	○	○	○	
			・お施餓鬼	○	○	○	
			・送り火	○	○	○	
			・エンマの赤飯	—	—	—	
			・ヤブ入り	○	×	×	
	31	天王様の祭り	・宵宮	○	○	○	現在は土曜
8	1		・本宮	○	○	○	〃 日曜
9	1	八朔（旧8月1日）（風祭）	・二百十日　まんじゅうをつくる	○	○	×	
			・熊川神社の秋祭り	—	—	—	
	22	十五夜（旧8月15日）	・お月様に供えものをする．ダンゴ15	○	○	×	
			・子供はもらいに歩く	○	—	—	
	19	神明社の秋祭り	・赤飯，ふかしまんじゅう	○	○	○	現在は日曜日
	21	彼岸	・春の彼岸と同じ	○	○	○	
10	9	亥の子	・亥の子のぼたもちを作る	○	○	×	
	20	十三夜（9月13日）	・ダンゴの数が13で，あとは十五夜と同じ	○	○	×	
	20	恵比須講	・1月20日と同じに行う	○	○	○	
	31	オカマサマ	・オカマのダンゴをつくる小36，荒神様に供える	○	○	×	
11	上〜中旬	ドジョウ粥	・麦まき祝い（夕食）	○	×	×	麦を作らなくなった
	15	オビトキの祝（七五三）	・男女とも7歳	○	○	○	

注　○行われている
　　×行われていない
　　—昔からやっていないもの

レゼント、バレンタインデーが家族間でやりとりがある。子供が小さいときは、クリスマス、七夕を家族で楽しんだ。成人式も祝った。

消滅と変容

Ｉ家の年中行事の変化が語るものは、地域共同体で支えてきた年中行事は、消滅に近い状態だということである。大きく消滅に向うのは、昭和四〇年頃からで日本が高度成長期を迎えるときであった。地域の連帯感は薄れ、残されたのは個人の家の行事が多い。本家であるため神仏に関する行事が、しっかり受け継がれているのが特色といえる。

近年神明社、熊川神社に初詣での若者がふえていることも、注目されるところである。また年中行事も特別な団体や心ある人々によって再生されているのが、年中行事の変容ともいえる。夏の七夕行事や、盛んになった夏祭りなども、連帯感を取り戻す一つのかたちではないだろうか。

Ｙ家にみられる新しい行事は、全国的に多くの家庭でおこなわれていて、今日ではきわめて一般的なものとなっている。なかでもクリスマスやバレンタインデーなどは、国境を越えてキリスト教国の行事が商業ベースにのって、各家庭に受け入れられたものである。

消滅に近い行事の多い中で、以前より盛んになったものに帯解き（七五三）がある。これは日本人の中流意識とともに、子どもの数の減少もあって、ますます華やかさを増している。唯一、古い年中行事の生き残りであろう。

調査にはあらわさなかったが、根強く日本の社会に生きつづけている行事に贈答儀礼がある。祖霊に供えるという盆礼の心は消滅に近い。しかし社会の基盤の変化もあって中元、歳暮時のデパートの混雑は例年のことである。またクリスマスプレゼントから、正月のお年玉、三月の雛祭り、五月の節供などは、子供を中心とした祝物の贈答で、市

域も年中行事化してなかなか盛んである。バレンタインデーの贈答はこれらの変形で、義理チョコなどにみえる意識は、きわめて日本的であるといえよう。

二一世紀を迎える日本は、世界のうねりの中にある。年中行事の変容はときの流れであろう。しかし日本という風土に、長い年月の間に育くまれてきたものには、日本人としての心のふるさとがあるに違いない。

心の豊かさが問われるとき、年中行事もまた振り返ってみたいものの一つである。